

第42回 研究助成受賞者講演会
コラボ分野研究助成受賞者講演会

ピアノと伝統楽器による音楽文化への新たな挑戦！！

2022. **11.10** (木)

会場 カワイ表参道 2F コンサートサロン パウゼ

17:30 開場 / 18:00 開演



主催 一般財団法人 カワイサウンド技術・音楽振興財団

後援 榊河合楽器製作所 カワイ音楽振興会

令和4年度 研究助成受賞者講演会 受賞者（グループ）と研究テーマ〔演奏順〕

- * Bulbul
サントウールとピアノのアンサンブルによる新たな可能性の追求
西洋／東洋の価値の接触 相違／融和点の探求
- * イフタタラガ
尺八とピアノによるアンサンブルの可能性の追及、伝統から革新へ
- * お囃子プロジェクト
「四拍子とピアノの共存と科学反応」

コラボレーションコンクールについて

渡辺健二

本日は、ピアノとジャンルを超えたコラボレーション研究の発表演奏会にお越し頂き、誠に有難うございます。

2017年より開設しているコラボレーション研究のためのコンクールですが、発表演奏会は新型コロナウイルスのためいったん中止とさせて頂いておりましたが、幸い、新型コロナも以前ほどの猛威は収まりつつあり、今回は久し振りにピアノと伝統楽器とのコラボレーションをお楽しみ頂けることとなりました。

カワイサウンド技術・音楽振興財団の設立は昭和58年に遡ります。元々はサウンド技術振興財団でしたが、平成23年に一般財団法人への移行と共に音楽振興部門を加え、音・音楽の両面から、社会に寄与する研究への助成を行っています。

音楽演奏と音楽研究は一見別々のものと理解されがちですが、蓄積されてきた知識を元に、誤りがあればそれをただし、新しい発見を加え、それらの成果をだれでも再利用できる形で発表し、人類文化の発展に寄与するという点では、手段と方法こそ違え、目指すところは同じです。

コラボレーションコンクールは、そうした考え方を踏まえ、日本音楽文化への新たな挑戦と題して、特にピアノと国内外を問わない伝統楽器とのコラボレーションに焦点を当て、新たな音楽表現が生まれてくることを期待して創設されたコンクールです。現在までに、邦楽器、中国の伝統楽器、ペルシアの伝統楽器等とピアノのアンサンブルが受賞されています。

ピアノと伝統楽器のアンサンブル。どの様な響きと音楽体験が生まれるのでしょうか。短い時間ではありますが、夜のひととき、新しい音楽表現をお楽しみ頂ければ幸いです。

審査委員

委員長：渡辺健二(ピアニスト)

委員：徳丸吉彦(音楽学者)、西原 稔(音楽学者)、河合健太郎(河合楽器製作所取締役副社長)

スケジュール

18:00 ~ 18:05

挨拶 審査委員長 渡辺 健二

18:05 ~ 18:35

発表 Bulbul

内海恵(サントウール) 川合清裕郎(ピアノ)

《演奏曲》

「サントウールとピアノのための組曲」

「夏の朝、雨が、名もなき墓に、静かに・・・～ C. ドビュッシーの追憶に～」

18:40 ~ 19:10

発表 イフタタラガ

バトエルデネ(馬頭琴) ボルドエルデネ(ホーミー / 馬頭琴) ドルギオン(ホーミー / 馬頭琴)

ミヤグマルスレン(ヤタガ(モンゴル琴)) 石川潤 (ピアノ / 作曲家)

《演奏曲》

「Oriental Rhapsody」(作曲 石川潤)

----- 19:10 ~ 19:25 休憩 -----

19:25 ~ 19:55

発表 お囃子プロジェクト

望月秀幸(邦楽囃子) 望月左太寿郎(邦楽囃子) 福原友裕(邦楽囃子・笛)

住田福十郎(邦楽囃子) 芳村伊十治郎(長唄三味線) ジャイアン谷口(パーカッション)

中村仁樹(尺八) 大口俊輔(アコーディオン) 山本祐之(ベース)

《演奏曲》

素囃子組曲 (構成 望月秀幸)

ピアノソナタ「黒御簾」第1楽章 (作曲 松永悠太郎)

早笛幻想曲 (構成 望月秀幸)

・サントゥールとピアノのための組曲

3つの作品からなる。第1曲第2曲は2022年の作曲、第3曲は2016年作曲後、2020年改訂。

1. Feroce

「Feroce」とは、野生的な獍猛さを意味するイタリア語。荒削りで粗野なエネルギーに満ちた小品。特殊な調律による“野蛮な音色”は、原始的ゆえにフレキシブルであるサントゥールならではの。

2. Recitativo — 砂漠の吟遊詩人

無拍節の緩徐楽章。副題の示す通り、堅琴を片手に朗誦する吟遊詩人のイメージ。特殊な調律、奏法によって堅琴を模倣する。曲の最後は、詩人の歌が、荒涼とした砂漠に消えてゆく。

3. Agitato

組曲の中心的な作品。終曲らしい華やかさの中に、中東的な情緒を織り交ぜようと試みた。

・夏の朝、雨が、名もなき墓に、静かに… ～C.ドビュッシーの追憶に～

2020年、テレンス・マリック(Terrence Malick 1943-)監督作品「名もなき生涯 A Hidden Life」を観た。舞台はWW2中のオーストリア。実在した敬虔なカトリック教徒を描いた伝記映画だ。彼は、自身の信仰を頑なに貫いたことで、政府からも世間からも反逆的と見なされ、最終的には理不尽にも処刑されてしまう。実話がベースで、脚色もほとんどない。(フィクションならあるであろう)神の救いも、処刑人の慈悲もなく、彼はあっけなく殺されてしまう。物語的には救いがなく、あまりに虚しい結末に打ちひしがれていたその時、エンドロールが流れ始め、そこでジョージ・エリオット(George Eliot 1819-1880)の名言が引用された。

歴史に残らないような行為が

世の中の善をつくっていく

名もなき生涯を送り

今は訪れる人もない墓にて眠る人々のおかげで

物事はさほど悪くはないのだ

*for the growing good of the world is partly dependent
on unhistoric acts ;*

and that things are not so ill with you and me as they

might have been, is half owing to the number who lived

faithfully a hidden life, and rest in unvisited tombs.

拙作は、この映画、この名言に感銘を受けて作曲された。

「人は2度死ぬ。1度目は肉体的に、2度目は人々に忘れ去られた時に。」という言葉は、所々で引用されすぎてしまい、もはや陳腐さすら覚えてしまうが、エリオットに依るならば、「人の善性」は2度の死を超え、永遠に残り続けると言えるのだろう。歴史に残らない、名もなき墓に眠る人々のおかげでこの世界はかろうじて成り立っているのだから。

あるいは、やや気取ったトートロジーを弄すれば、「人が死なない限り、人は死なない」と言えるのかもしれない。人類が存続する限り、人々は過去を追憶し続ける。具体的な何かを思うのではなく、幾千年も紡がれてきた人々の善き営みを想い、そのスケールのあまりの大きさに、感嘆し、驚愕し、畏怖するのであり、その行為こそ、名もなき人々に思いを馳せることに他ならないのだから。

最後にこれらと共鳴する、ドビュッシーの盟友ピエール・ルイスの「ピリティスの歌」の一節を紹介したい。

ここに足を止めてくれるあなたには、感謝とともにひとつの運命を祈念しよう

——愛されること、そして愛しないという……。

さらば。いつの日か年老いたとき、思い出して欲しい ——あなたはわたしの墓を見たのだと。

本演奏研究の概要と位置付け

①文化(=言語、風土)と音楽の関わり合い ②サントゥールの楽器法の追求 の二つが、本研究の大きな柱である。①は、すでに世界中に優れた研究が多数あり、浅学非才な我々の出る幕はほとんどないが、唯一我々にできること –そして、ある意味で我々にしかできないことでもあるのだが– があるならば、それぞれの文化から抽出したエッセンスを、作曲、演奏に応用、昇華することだ。ヒルスブルンナー(Theo Hirsbrunner 1931-2010)は、ドビュッシーのことを「音楽史上最初のコスモポリタン」と評したが、目指すべくはそこであろう。中東の音楽の「表面的な模倣」でも、西洋音楽体系への「無理矢理な吸収」でもない、限りなくフラットな視点からの融和 → 作曲/演奏による具現化。これは、西洋人でもイラン人でもない我々、そして自らで作り、自らで演奏する我々だからこそ実現可能であり、これは換言すれば、“自身の身体を東/西の融和点”とする試みであると言える。②はより実践的な、サントゥールという楽器の可能性の追求である。研究成果として、拙作において用いた特殊奏法を紹介したい。これらはおそらく、ダルシマーやツィンバロムなど、同類の楽器では実現できない、あるいはできたとしても得られる効果は薄いと思われる。サントゥールのための独自研究であるという点は強調しておきたい。

・スコルダトゥーラ(特殊調弦)

サントゥールは4本の弦で一つの音を作る。これら4本の弦を、それぞれ別の音に調弦することにより、一打で和音が奏でられる。拙作は複雑な調弦を施したが、協和する調弦を施し純粋な和音にすることも可能。この特殊な技法はイラン古典音楽の演奏において既に実践済みであり、現代音楽以外の分野への予想外の広がりも見せた。

・ハーモニクス

サントゥールのメズラブ(マレット)にフェルトが貼られていることにより、ハーモニクス奏法も可能であることがわかった。低い音域の弦であれば第2、第3倍音まで綺麗に得られる。また、より高次の倍音を効果音的に使用することも可能であると思われる、これを音楽的にいかに用いるか、今後も試行錯誤を重ねてゆきたい。

・ピッチカート

これはサントゥールのメズラブの形から発想を得た。やはり、他の同類楽器のマレットでは難しい。

今後の活動

「サントゥールとピアノシリーズ」と題した、東西比較に関心をおいた演奏会は継続して行ってゆく。(Vol.4は2023年春頃を予定。)次回演奏会では美術系の研究者(大学教員)とのコラボレーションも予定している。

また、サントゥールとピアノのための作品の委嘱も現在打診中だ。しかし、サントゥールという楽器の特殊性からか、まだ正式なお返事はいただけていない。川合以外の作曲家がどのようにサントゥールおよびペルシャ音楽にアプローチしてゆくのか、大変興味深いところであるので、こちらも是非とも実現したい。

【内海 恵 Kei Utsumi サントゥール/ピアノ】

大阪音楽大学卒業。これまでピアノを太田康子、芹澤文美氏に師事。第25回来音会ピアノコンクール銅賞。副賞としてドイツでの音楽研修に参加。在学中、第3回 Concorso MusicArte 奨励賞。テアトロオリンピコ国際音楽祭に参加。ミラノ・クザーニ宮殿など、イタリア各地の演奏会に出演。2013年、NHKBS1にてサントゥール奏者として紹介された。2020年、カワイサウンド技術・音楽振興財団より研究助成を受ける。

【川合 清裕 Kiyohiro Kawai 作曲/ピアノ】

大阪音楽大学作曲専攻卒業。卒業時に褒賞として優秀賞を授与される。これまでに作曲を高昌帥、永田孝信の各氏に、ピアノを土井緑氏に師事。また、プーリー・アナビアン氏にサントゥール、蔡怜雄氏にトンバクのレッスンを受ける。第32回現音作曲新人賞1位、第9回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール1位、他第8回JFC作曲賞コンクール入選、他受賞多数。関西現代音楽交流協会会員。現在、大阪音楽大学作曲助手。附属音楽院講師。

モンゴル民族楽器およびホーミーの、ピアノとの調和の可能性

グループ名：イフタタラガ

プログラム：オリエンタル・ラプソディー(受賞曲)他 計約 30 分

モンゴル国において、民族楽器の芸術水準は日進月歩であり、西洋楽器とのアンサンブルなども盛んに行われています。優秀な作家も数多く現れ、今や伝統楽器というカテゴリーではなく「新しい近代楽器」として評価がふさわしいのかもしれない。

私たちは日頃より、モンゴル国の個性豊かなさまざまな楽器を、クラシック、J-POPs、民謡、民族音楽などと融合させて、さまざまな場所・機会において演奏をしてきましたがこのたび、東京都荒川区南千住に、日本初のモンゴル音楽レストランという活動拠点を設け、カワイグランドピアノを導入し、より多くの皆さまに、気軽に私たちの音楽を聴いていただけるようになりました。

しかしながら、周知のとおり新型コロナという不測の事態により、私たちを含め、多くの音楽家たちは未曾有の危機にさらされています。そこで今回は、そんな安穏とした状況を吹き飛ばしたく、さまざまなジャンルの曲を準備し、ピアノと融合させた新しい音楽を皆様に届けたいと思っています。伝統唱法「ホーミー」との合奏にも挑戦します。

さらに今夏には、これも日本では初となります「馬頭琴専門ショップ」がオープンしました。馬頭琴の製作・販売から実技指導、メンテナンスに至るまで、モンゴル音楽のすべてを集約し、日本に新しい音楽文化を根付かせたいと思っています。

イフタタラガ

2015年に結成した民族楽器グループ。モンゴルの伝統芸術ホーミー、馬頭琴、モンゴル琴、ヨーチン、イケル、ツォール、トブショール、口琴、そして民謡オルティンドーを通してモンゴルと日本両国の文化的架け橋となるとともに、故郷のすばらしい芸術を世界各国の人々に紹介し、素敵な音楽を届けています。小学校での演奏などにも赴いています。

【プロフィール】

バトエルデネ(馬頭琴)

- ・1995年 モンゴル国立芸術大学馬頭琴学科、同大学院修士課程修了
- ・2000年 ヨーヨーマ・シルクロードアンサンブルに参加
- ・2011年 ヴァイオリンの五嶋みどり氏と共演。東京、大阪でコンサート開催

ボルドエルデネ(馬頭琴、ホーミー)

- ・2008年 モンゴル国立大学民族芸術研究学科卒業 認定「馬頭琴」製作者
- ・2013年 モンゴル大統領杯第1回国際ホーミーグランプリ最優秀賞受賞
- ・2015年 モンゴル国北極星勲章授章

ドルギオン(馬頭琴、ホーミー)

- ・2004、2005、2006年 東南アジア民族音楽フェスティバルにモンゴルから出演。
- ・在学中は年度優秀賞を2年連続受賞 2004年からホーミーを習得。
- ・2006年から日本への音楽特待生として来日し日本航空高校、専門学校入学、卒業。

ミヤグマルスレン(ヤタガ(モンゴル琴))

- ・1996年 モンゴル国立音楽舞踏カレッジ卒業
- ・～2000年 モンゴル国立馬頭琴交響楽団所属
- ・2015年 モンゴル国文化前衛活動家章授章

石川 潤(ピアノ)

- ・2014年 東京藝術大学作曲科卒業
- ・2017年 チェリスト山澤慧氏公演で現代音楽作品「My Precious」選出、初演。
- ・2020年公開の映画「完全なる飼育 etude」で音楽を担当
- ・本演奏研究の概要と位置付け&今後の活動

四拍子とピアノの共存と化学反応

お囃子プロジェクト

■プログラム

1 『素囃子組曲』 構成 望月秀幸

素囃子とは、「三味線や唄などが入らずお囃子のみで演奏する」という意味を表しています。

歌舞伎の劇中音楽として誕生した邦楽囃子は、約400年の歴史の中で目覚ましい進化を遂げてきました。音色や奏法など、その一つ一つが他にはない独特の雰囲気を出し、演目のさまざまな場面で活躍します。今回は、歌舞伎でもとても有名な「獅子」をテーマした演目の中で活躍する、邦楽囃子のフレーズや手組を中心に構成した素囃子を披露します。

始めは「一声(いっせい)」という厳かな演奏で始まり、次に「乱序(らんじょ)」と呼ばれる、獅子が登場する場面で演奏される囃子になります。ここでは荒々しい演奏の中に「つゆ」と呼ばれる太鼓と小鼓だけの静かな場面があり、舞台となっている中国の清涼山の陰しさを逆に静かに表現するという斬新な演出となっています。最後は「狂い(くるい)」という囃子になり、獅子が舞い狂う様子を表現します。

※獅子とは、中国に存在する架空の生き物とされていて、日本のあらゆる伝統芸能に獅子を題材とした芸能が存在します。

2 『ピアノソナタ「黒御簾」第1楽章』 作曲 松永悠太郎

3 『早笛幻想曲』 構成 望月秀幸

邦楽囃子には、登場人物の役柄や職業、位(くらい)などによって、必ず決められた演奏をするというルールがあります。この楽曲に取り入れている「早笛(はやふえ)」もその一つで、動物や亡霊など人間ではない者が登場するときや、嵐や大海原などの激しい自然現象の場面で必ず演奏される手組です。

この楽曲は『激しく荒れる大海原と、海に散った亡霊たち。その念を鎮める一筋の光』をテーマにしていて、「早笛」を中心に構成しました。ピアノと囃子のコラボレーションでこのテーマをどのように表現するのか、是非楽しみにしてください。

■お囃子プロジェクトプロフィール

歌舞伎や日本舞踊など伝統芸能の舞台上で活躍する邦楽囃子。「その囃子の魅力を多くの人に伝えたい」という熱き想いをモットーに、2010年、邦楽囃子演奏家の望月秀幸と望月左太寿郎が立ち上げたお囃子プロジェクト。

小鼓・締太鼓・大鼓・笛などをメイン楽器とし、継承されてきた伝統は守りながらも、固定概念にとらわれることなく、自分たちが考える『お囃子音楽』を創造すべく活動をしています。

今までに手がけてきた楽曲は、美空ひばりの「お祭りマンボ」や「りんご追分」など昭和歌謡の名曲や、ベートーヴェンの「運命」などのクラシック。ほかにもポップスやラテン、民謡。さらにはプロレスの入場曲まで。

様々なジャンルの音楽をお囃子の魅力を存分に楽しめるアレンジで披露し、好評を博しています。

【活動履歴】

2010年の立ち上げ以降、20回を超える主催公演を開催。

他にも、2019年元旦にはNHK Eテレ『新春眼福！花盛り～古典男子によるニッポン芸能いまのカタチ～』、同年8月にはNHK Eテレ『にっぽんの芸能～夏祭り！和楽器の名手大集合～』にテレビ出演し、同年4月には国立劇場主催公演「明日をにぎう新進の舞踊・邦楽鑑賞会」にも出演を果たすなど、メディアや古典の世界でも取り上げられ益々活動の幅を広げています。

また、演奏活動以外でも、伝統芸能の普及を目的としたお囃子レクチャーや小鼓教室など、全国各地で開催しています。

本演奏研究の概要と位置付け

今回の研究の目的は、『伝統的な囃子とピアノの双方が、本来の姿を失わずに共存する』という事です。

近年、伝統楽器や邦楽と洋楽のコラボレーションは多方面で普及してきていて、また、和洋 MIX のバンドなども沢山活躍してきています。しかし、そのほとんどは伝統楽器に洋楽的なフレーズを演奏させ、楽器の音色や組み合わせをパフォーマンスとして取り扱っているものであります。本来、伝統楽器は古典の奏法やフレーズに意味のあるものが多く、それらを活かしてこそ真のコラボレーションと言えるのではないかと我々は考えています。そこで、古典の奏法や手組をそのまま活かし、さらには、楽曲のテーマに合う意味を持つお囃子のフレーズや手組を取り入れ共存させる編曲や作曲を掲げてきました。

しかし、ピアノは例外です。

ピアノが持つ残響や音色の性質は、囃子の特性を生かした共存が非常に難しく、これまで挑戦を避けてきました。今回の研究は、この課題を乗り越えた先にある新たな音楽の創造であり、その成果として伝統楽器であるお囃子とピアノの真のコラボレーションを披露する所にあります。

■今後の演奏予定

『お囃子プロジェクトVol.18』

2022年12月27日(火)

時間 ①15:00/②18:30

場所 紀尾井小ホール

料金 3,500円

◆出演

望月秀幸(邦楽囃子)

望月左太寿郎(邦楽囃子)

◆ゲスト

福原友裕(邦楽囃子・笛)

住田福十郎(邦楽囃子) 杵屋勝十郎(長唄三味線)

村瀬 Chang-woo 弘晶(パーカッション) 鈴木広志(サクソフォン) 田中庸介(ギター) 木村仁哉(スーザフォン)

『新春LIVE2023 お囃子プロジェクト inかなつくホール』

2023年1月7日(日)

時間 14:00開演(開場13:30)

場所 横浜市東神奈川区文化センターかなつくホール

料金 一般3,000円 子供1,000円 加賀川区民割引2,500円(300名定員・全席自由)

◆出演

望月秀幸(邦楽囃子)

望月左太寿郎(邦楽囃子)

◆ゲスト

福原友裕(邦楽囃子・笛)

住田福十郎(邦楽囃子)

芳村伊十治郎(長唄三味線)

ジャイアン谷口(パーカッション)

中村仁樹(尺八)

大口俊輔(アコーディオン)

山本祐之(ベース)